

目次

- 岐路に立つ西ベンガル共産党
- 坂本竜馬・西郷隆盛・レーニン・毛沢東の共通項
- 【中国経済最新統計】(試行版)

岐路に立つ西ベンガル共産党

大西 広

30 年以上の極めて強固な共産党政権

統計学の歴史に輝くマハラノビスが設立したインド統計研究所はインドの首都ではなく西ベンガル州のカルカッタにあり、そこでの交流とセミナー参加のためにこの 2 月 15-17 日の間滞在した。先の「ニュースレター」では、小島正憲氏がバングラデシュ経済の大きな可能性をレポートしてくださったが、実はこのバングラデシュ、英領インドの時代には「東ベンガル」と呼ばれて「西ベンガル」と対をなしている。そして、実際、カルカッタで活動するイスラム教徒も戒律が緩く、商業部門で目立った活動をする極めて活動的な「民族」であった。私は中国の少数民族を研究しているので、ウイグル族もこうあって欲しいと思いながら、カルカッタ市内 MG ロードにある巨大な農産物市場をウォッチすることができた。



イスラム地区の活気ある農産物市場

しかし、この西ベンガル州が長期にわたる共産党政権下にあることをご存知の方はそう多くない。1977 年の州議会選挙で大勝し、直近の 2007 年にも「左翼戦線」として 294 議席中の 235 議席を獲得している。市内でも中心のショッピング街を少し離れると赤旗や共産党のマークがあちこちにあり、ついでに言うと、カルカッタのメイン・ストリートの名前の中には「レーニン通り」や「ホーチミン通り」といった名前がある。インドでは、ここ以外にもケララ州が同様の政治をもっているが、インド的には「州」の規模のネパールでもマオイストが第一党、もうひとつの共産党が第三党となっているなど、共産党が強い、というのはそう不思議な現象ではない。がしかし、昨年(2009)の総選挙では西ベンガルやケララで今度は共産党が大敗し、その原因をどう理解するかがひとつの社会科学テーマとなっている。せっかくなので、訪問先で詳しく聞いてみるとなかなか面白い事態が見えてきた。ということで、少しこの場を借りてレポートさせていただくと次のようになる。



街角にあった共産党の宣伝。貧困地区ほど多いというのが印象

経済成長による基本的な支持基盤の弱体化

まずは、その基本的な支持層であるが、やはり貧困層と小農にあるようである。インドは戦後においても全国的には農地改革がなされなかったが、共産党政権下となったここ西ベンガルとケララでは行なわれ、地主とは対立したものの基本的な成功を収めて農民たちの圧倒的な支持を得るようになる。また、政府の分権化も推進し、人々の声をより通りやすくするなどの成果を収めている。これが基本的な成果であるが、私の考えでは、この成果をも吹き飛ばすような新しい変化が生じている。それは、実は経済成長それ自身である。

もちろん、中国の風景に見慣れた自分としては、カルカッタの街の汚さや発展の遅れは第一印象として大きかったが、よくよく考えると、この「遅れ」は中国と比較して10年か15年程度のもと思われる。というより、イスラム教徒もそうであるが、もちろんインド人の活力もものすごい。ぶらりだらりとしている人間を見つけるのは簡単ではなく、誰もが何かを一生懸命している。この活力が現在の成長の源泉となっており、そして、人々の生活が改善基調にあることはどう見ても明らかである。したがって、ほぼ間違いなく貧困層は減少の過程にあり、中産階級は増大の過程にある。そして、もしそうすると、貧困層にしか基盤を持たない政権は極めて危険ということになる。

というより、もっと強く言うと、当地の共産党は「成長政策」をとって、外資やタタなど大企業の誘致に一生懸命である。平均所得を上げるには産業化とそれによる雇用の創出が不可欠であるが、そのためとばかりに各地で企業への優遇政策をとり、高まった所得に対応したショッピング・センターの建設を推進した。が、それがどうも裏目に出ている。共産党は外資や大企業の味方になったのかとか、これら開発のための土地取得においても土地を取り上げられる農民や商人への補償金が少ないとか、新しいショッピング・モールに入るのに必要なお金が高いとか、そして最後には教育など他にもっと重要な仕事があるではないかとか言われている。私はその補償金が本当に少ないのかどうかを判断する力はないが、それでもやっていることは中国と同じである。そして、その中国はこの「成長政策」で基本的には支持を広めているにも関わらず、ここ西ベンガルでは支持を失っているとすると、何だか可哀想な気がする。というより、この「失敗」によって「成長政策」からの離脱が生じないかとの不安を感じてしまうのである。



カルカッタ中心部に新たに開かれた近代的なショッピング・モール

以前にこの「ニューズレター」でも書いたことがあるが、左翼政権にはあえて「成長政策」を拒否して貧

困層を貧困層として維持せんとするかのような政策がある。私はその典型がベネズエラのチャベスであり、彼による貧困層への大量の補助金は現状維持にしかならないのでは、と私は考えている。そうであるだけに、この西ベンガル共産党(正確にはインド共産党マルクス主義派の西ベンガル組織)による「成長政策」の堅持を強く望むものである。

鄧小平と何が違っているか

しかし、考えてもみれば、こうした政策への重点の転換は、なかなか大衆に理解されない。企業の誘致は直接には企業への優遇措置であり、直接に人々に何かを与えるものではないから、人々が「共産党は企業の味方になった」と思うのはある意味当然のことである。インド統計研究所の研究者も、もっとちゃんと共産党政権は説明をすべきであったと述べるが、それ以上に、こうした「人民の反乱」が通常のことであるとの認識も重要ではないだろうか。そして、もしそのように考えると、いよいよこの転換をうまくやりのけた鄧小平の偉大さに思いが及ぶ。

たとえば、この鄧小平は「貧困は社会主義ではない」と述べて「まずは一部が先に豊かになる」ということで、格差の拡大を正面から容認する「理論」を打ち立てた。特にこの考えを、生産力発展を社会の基本的な原則とするマルクス主義のそれとして明確に打ち出したことが重要ではないだろうか。やろうとすること、やっていることをマルクス主義にそったものとして言えるかどうかは「共産党は企業の味方になった」と言われないうために決定的であったというのが私の意見である。この点で西ベンガル共産党には弱点があった。

さらにもうひとつ、もっと根本的に言うと「資本主義の時代に資本主義的政策を行なうのはマルクス主義的に当然のことである」というところまで言い切れるかどうかも重要である。鄧小平の黒猫白猫論はほぼこの内容を主張したものであり、また毛沢東はもっと明確に「国民党は十分に資本主義をできないが、我々はそれを恐れない」と述べたことがある。この後者のことは、授業に参加する中国人留学生に教えてもらった。

もちろん、鄧小平の「転換」がインドとちがって「一党制」という有利な条件で行なわれたこと、また文化大革命という特別の国民的経験を基にしていたことも事実である。が、それを言うだけでは西ベンガルの教訓にならない。その意味で、上記のような「理論の問題」として問題を整理したいというのが私の意見である。

坂本龍馬・西郷隆盛・レーニン・毛沢東の共通項

17. FEB. 10

中小企業家同友会上海倶楽部代表

上海センター外部研究員(協力会理事) 小島正憲

2010年度のNHKの大河ドラマは、坂本龍馬が主人公の「龍馬伝」である。1月3日には、その第1回が放映された。私はそれを見ていて、坂本龍馬・西郷隆盛・レーニン・毛沢東の共通項に気が付いた。彼らは共に、まず極左冒険主義を押さえ込むのをその主要な役割として、歴史に登場してきていたのである。

1. 坂本龍馬

第1回分のテレビの中の坂本龍馬は、主演の福山雅治のキャラクターのせいかな、どこかひ弱な感じがした。またそれを弱虫の子供時代の映像が増幅していた。とてもそこから維新の大業を支えた傑物の姿は想像できなかった。さらに土佐の上士の横暴にいきり立つ下士の中であって、つねにその暴発を抑える側に立ち、道端の泥田の中に土下座して上士の殴打に耐えているシーンは印象的であった。もしここで龍馬が朋友と共に感情を爆発させ、上士に歯向い刀を抜いていたならば、龍馬は維新の大業に大きな役割を果たすことはできなかったであろう。それにしても、その龍馬の姿は「韓信の股くぐり」にも似て、見ていてもあまり格好のよいものではなかった。おそらく私ならば刀を抜いていただろうし、そして切腹ということになり、歴史に名を残すこともなく消えていっていただろう。そもそも男というもの、だれしものが格好良く生きたいと思ひ、恥を忍んで隠忍自重することが不得手なのである。

1866年1月、坂本龍馬は京都の伏見の寺田屋で襲撃されたが、高杉晋作から貰うけた短銃でその場をしのいだという。その寺田屋は今も営業中なので、素泊まりならば可能である。またそこで夢の中で龍馬と会うことができるし、龍馬に危急を知らせるため、おりょうさんが裸で駆け上がったという階段を踏みしめることもできる。その数年前、寺田屋では薩摩藩士精忠組同士の壮絶な斬り合いがあった。これが有名な寺田屋騒動(1862年4月)である。

2. 西郷隆盛

ここで登場してくるのが西郷隆盛である。1862年2月、挙兵東上するという島津久光に、西郷隆盛はわざわざ遠島先の奄美大島から暴発寸前の精忠組志士を押さえ込むために呼び寄せられた。しかし西郷は、久光の「下関で待つ」という指示に従わず、過激派志士たちの京都焼き討ちの企てを自ら止めようと試み、上京してしまった。これが久光の逆鱗に触れ、西郷は捕縛され沖永良部島に再び遠島となる。このとき西郷は過激派志士たちの極左冒険主義を、自らの体で止めようとしたのである。なお大久保利通も過激派志士たちの跳ね上りを抑えようとしたができず、久光

に「精忠組志士の間に信望がある西郷ならば暴発を止めることができる」と、その呼び戻しを献策している。このときだけでなく西郷は多くの場面で精忠組志士の暴発を諫めている。残念ながら西郷が遠島になった後、寺田屋に籠る有馬新七らの精忠組志士を、久光の命で奈良原繁らの精忠組志士が襲撃し、7名が上意討ちになるという事件が発生するのである。

坂本龍馬が仲立ちした薩長同盟も、西郷の柔軟な思考がなければ成立していなかった。「長州討つべし」という藩内の若手たちを押さえ込んで、西郷らは薩長同盟を締結した。そしてそれが維新の大業を成功させた。

西郷の面目が躍如となる江戸城の無血開城も、西郷がいたずらな損耗を避けようとしたものであり、それは官軍内部の極左冒険主義を抑えきった結果でもあった。勝海舟は江戸焦土作戦を準備してその会談に臨んでおり、西郷が極左派に押しきられていたならば、歴史はかなり違うものになっていたであろう。その後の上野での戦いで、官軍が苦戦し、かろうじて佐賀藩のアームストロング砲で勝ったことを見れば、西郷が極左派を抑えこみ無血開城に持ち込んだことがいかに正解であったかがよくわかる。

3. レーニン

ロシア革命を成功に導いたレーニンは、1920年4月、国際共産主義運動内に生じてきた「左翼」小児病に対して、それを批判するために、「共産主義における左翼小児病」を書き上げた。

- ・「戦闘が敵に有利で、われわれに不利なことがあらかじめわかっているときに、戦闘をはじめることは罪悪である。そして、あらかじめ不利だとわかっている戦闘を避けるために『迂回、協調、妥協』ができないような革命的階級の政治家はものの用にはたさない」(P. 86)
- ・「直接的な、公然たる、真に大衆的な、真に革命的な闘争が起こる条件がまだないときに革命家であること、革命的でなくてむしろ多くの場合まったく反動的な機関のなかで、革命的でない環境のなかで、革命的な活動方法が必要であることをすぐには理解できない大衆のなかで、革命の利益を(宣伝により、扇動により、組織によって)まもることのほうがはるかにむずかしい。またはるかにとおしい」(P. 114)
- ・「仕事と活動のあらゆる分野に例外なく習熟し、どんな場合にも、あらゆる困難、あらゆるブルジョア的な慣習、伝統、習性にうちかつすべをまなびとらなければならぬ。これとちがった問題の立て方は、まったくふまじめであって、まったく子供っぽいことである」(P. 139)

※上記は大月書店国民文庫「共産主義における左翼小児病」から抜粋。

4. 毛沢東

毛沢東はその前半生を、主に党内の極左冒険主義との戦いに費やした。1945年4月20日、中国共産党第6回大会第7回中央委で採択された「若干の歴史的問題についての決議」において、そのことを下記のように総括している。

- ・「われわれが指摘しなければならないことは、この10年間に、わが党は、偉大な成果をおさめたが、ある時期にはまた、いくつかのあやまりをもおかしたことである。そのうちでも、1931年1月から35年1月の遵義会議までの時期におかした政治路線、軍事路線、組織路線における極左的あやまりはもつとも重大であった。このあやまりは、わが党と中国革命に重大な損失をもたらした」

中国共産党は創立以来、幾度となく左右の日和見主義に振り回されたが、中でも極左冒険主義の策動の結果、組織崩壊の危機になんども曝された。

- ・1927年11月党中央拡大会議では、陳独秀の投降主義への反動として、極左的妄動主義(冒険主義)路線を形成、少数の党員と少数の大衆に勝つ見込みのない地方的な蜂起を全国的に組織するように命令し、大失敗に終わった。
- ・1930年6月、党中央政治局の李立三が極左的決議「革命の新しい高まりと、まず1省また数省で勝利すること」を掲げて戦い、多くの場所で手ひどい敗北を喫した。
- ・1930年9月、陳紹禹が「中国共産党のいっそうのポリシェビキ化のためにたたかえ」と、李立三をさらに左から批判し、本来右ではない同志を死地に追いやった。
- ・1930年以降、蒋介石はドイツきっての名将:フォン・ゼークトを招聘し、兵力100万・飛行機200機を投入、3000のトーチカを築き、赤軍をじりじりと包囲する作戦に切り替えた。1931年9月、秦邦憲(博古)は、右翼日和見主義に反対し、コミンテルンから派遣されたドイツ人の軍事指導者オットーブラウン(中国名:李徳)の指示のもとに、蒋介石の第5次包囲討伐に正面から戦うという極左路線を取った。迎え撃つ赤軍は10万であったが、得意のゲリラ戦を放棄して戦ったため、たちどころに6千の兵員を失った。その後、赤軍は一度も勝利を得ることができず、根拠地を放棄し、1934年10月、長征へと旅立たなければならなかった。

その後、長征途中の貴州省遵義で、毛沢東は博古ら極左冒険主義者らから指導権を奪還した。

- ・「遵義会議が、当時、決定的な意義を持っていた軍事上、組織上の誤りを全力をあげて是正したことは、全く正しかった。この会議によって、毛沢東同志を先頭とする党中央の新しい指導がはじまったことは、中国の党内でもっとも大きな歴史的意義を持つ転換であった」 新日本出版社 毛沢東選集 第3巻 P. 221～

5. 鄧小平

蛇足を承知で述べるならば、鄧小平も南巡講話の中で、主に左派を警戒している。

- ・「右が社会主義をダメにする可能性もあるが、左も社会主義をダメにする可能性がある。中国は右を警戒する必要も

あるが、しかし主要には『左』を防止しなければならない」

6. 現代の極左傾向

私の学生運動時代でも、極左派のアジやジグザグデモは、一見格好がよかった。私の派は「非暴力抵抗主義」の旗を掲げ、現実的な改革を一步步積み上げて行くという方針だったので、極左派からその行動を、「デモはデモでも…のデモは、いつも歯がゆい、じれったい」とからかわれ続けた。そんなとき私は、どうしても自分の行動が卑怯者のように思えてならなかった。そしてバカな男気を出し、ついつい彼らの挑発に乗り、よく殴られたのである。そのような中でも私の友人は、血気にはやる私を戒め、リーダーとして終始一貫、隠忍自重し活動を続けた。その後、極左派は連合赤軍へ行き着き、多大な犠牲を払い、社会に大きな迷惑をかけ、結局、自壊自滅した。

中国では、一昨年のチベット、昨年ウイグルと、2年連続で少数民族の若者が暴発し、結果として多くの人民の尊い血が流された。しかし彼らの行為は人民相互の憎しみ以外になにも生み出さなかった。チベット族もウイグル族も、現況では漢族の圧倒的な強さに勝つことはできない。彼らはレーニンの「負ける戦いを始めることは罪悪である」という言葉を、しっかり噛み締め、坂本竜馬が上士に這いつくばったように、ここは隠忍自重しなければならない。今は、地道な活動を続け、暴力以外のあらゆる場面で漢族を凌駕することが必要なのである。それをしないで、ただいたずらに暴発することは、罪悪である。またそれを正当化する幾多の議論も、慎むべきである。

現代中国には、坂本竜馬や西郷隆盛、レーニン、毛沢東のような極左冒険主義をしっかりと押さえ込み、運動を正しく指導するリーダーが必要なのである。

中国経済最新統計】(試行版)

上海センターは、協力会会員を始めとする読者の皆様方へのサービスを充実する一環として、激動する中国経済に関する最新の統計情報を毎週お届けすることにしましたが、今後必要に応じて項目や表示方法などを見直す可能性がありますので、当面、試行版として提供し、引用を差し控えるようよろしくお願いいたします。 編集者より

	① 実質 GDP 増加率 (%)	② 工業付 加価値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億\$)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009年	8.7		15.5		31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2月		(15.4)	19.1	8.7	(24.3)	82	6.3	35.6	▲38.0	38.3	17.4	15.7
3月	10.6	17.8	21.5	8.3	27.3	131	30.3	24.9	▲28.1	39.6	16.2	14.8
4月		15.7	22.0	8.5	25.4	164	21.8	26.8	▲16.7	52.7	16.9	14.7
5月		16.0	21.6	7.7	25.4	198	28.2	40.7	▲11.0	38.0	18.0	14.9
6月	10.4	16.0	23.0	7.1	29.5	207	17.2	31.4	▲27.2	14.6	17.3	14.1
7月		14.7	23.3	6.3	29.2	252	26.7	33.7	▲22.2	38.5	16.3	14.6
8月		12.8	23.2	4.9	28.1	289	21.0	23.0	▲39.5	39.7	15.9	14.3
9月	9.9	11.4	23.2	4.6	29.0	294	21.4	21.2	▲40.3	26.0	15.2	14.5
10月		8.2	22.0	4.0	24.4	353	19.0	15.4	▲26.1	▲0.8	15.0	14.6
11月		5.4	20.8	2.4	23.8	402	▲2.2	▲18.0	▲38.3	▲36.5	14.7	13.2
12月	9.0	5.7	19.0	1.2	22.3	390	▲2.8	▲21.3	▲25.8	▲5.7	17.8	15.9
2009年												
1月				1.0		391	▲17.5	▲43.1	▲48.7	▲32.7	18.7	18.6
2月		(3.8)	(15.2)	▲1.6	(26.5)	48	▲25.7	▲24.1	▲13.0	▲15.8	20.5	24.2
3月	6.1	8.3	14.7	▲1.2	30.3	186	▲17.1	▲25.1	▲30.4	▲9.5	25.5	29.8
4月		7.3	14.8	▲1.5	30.5	131	▲22.6	▲23.0	▲33.6	▲20.0	25.9	27.1
5月		8.9	15.2	▲1.4	(32.9)	134	▲22.4	▲25.2	▲32.0	▲17.8	25.7	28.0
6月	7.9	10.7	15.0	▲1.7	35.3	83	▲21.4	▲13.2	▲3.8	▲6.8	28.5	31.9
7月		10.8	15.2	▲1.8	(32.9)	106	▲23.0	▲14.9	▲21.4	▲35.7	28.4	38.6
8月		12.3	15.4	▲1.2	(33.0)	157	▲23.4	▲17.0	▲2.05	7.0	28.5	31.6
9月	8.9	13.9	15.5	▲0.8	(33.4)	129	▲15.2	▲3.5	10.6	18.9	29.3	31.7
10月		16.1	16.2	▲0.5	(33.1)	240	▲13.8	▲6.4	▲6.2	5.7	29.5	31.7
11月		19.2	15.8	0.6	(32.1)	191	▲1.2	26.7	10.0	32.0	29.6	34.8
12月	10.7	18.5	17.5	1.9	(24.1)	184	17.7	55.9	9.7	-44.6	27.6	31.7
2010年												
1月				1.5		142	21.0	85.6	24.7	7.8	26.0	29.3

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。

2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1月と2月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、()内の数字は1月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。

3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の86%（2007年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。